
謎世界の救世主

阿万之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

謎世界の救世主

【NZコード】

N5660N

【作者名】

阿万之

【あらすじ】

謎の世界に突然召喚された少年、御影悠太。彼は戸惑いつつこの世界からの脱出を図ろうと画策するも、上手くいかない。他に召喚されてきた同じ日本人と仲良くなり、一人でこの世界から抜け出すために小さな世界を探っていく

俺とお前でここを脱け出そうぜ。

外は薄暗く、世界は混沌としている。ここは異世界の町なのか、それとも地獄なのか。そんなことをうすぼんやりとした頭で思つ。俺とお前でここを脱け出そうぜ。

少年、御影悠太。以前まで中学生をしていた。今は違う。普通の中学生とは違う生活をしている。

ここは牢獄のようなもの。いつでも薄暗く、空は晴れない。

少年御影悠太は簡易寝台の上で横になり、最近は見慣れてきた天井を見上げていた。今でもこの世界のことを認めたくない気持ちはあつた。だがだんだんとそんなことはどうでもよくなり、現実を受け入れるというより、ただぼんやりとその場にいるだけだった。

耳から聴こえるものといえば誰かのすすり泣き、足音。外から聞こえるのは風の音、雨、雷鳴。

汚らしい茶色の石壁は損傷が酷く、ぼろぼろになつて欠けている箇所がちらほら見られた。天井にも裂けた傷が列になつていて、苔むして緑色になつてているところもある。床はところどころ赤く滲んでいる。まるで血が染み込んでいるように見えた。

少年御影悠太のいる個室には彼の寝るベッドのほかにも一つ同じベッドがあり、そこには今は誰もいない。

もう一週間姿を見ない。新しい同居人。名前は荒井といった。不潔感漂う髪の長い頭の若者。彼は悠太よりも一週間ほど早くここにきていた。しかし、今はいない。どこにいるのか、悠太にもわからぬ。

ベルの音が鳴つた。スピーカーで鳴らす音ではなく本物の呼び鈴だ。悠太はゆっくりと起き上がつた。腹に手をやる。あまり食欲はないが、それでも今食べないとあとはない。ベッドから出て外に。

アーチを描いた木の扉を出て、廊下を歩く。ベルに反応した連中が廊下を歩いている。彼らも意気揚々と食事に望むわけではないのだ。食えるのが嫌だから食べるのだ。悠太も飢えを体験したが、ひもじいものだった。

廊下は薄暗いのでところどころ松明が灯されている。石壁はやはり汚らしい見た目だが、実際汚れきっている。

少年はスプーンを忘れたのを思いだす。引き返してスプーンを持つて再び廊下へ。スプーンは銀でできているらしいが、ここでは大した価値はない。ここで大きな価値があるのは酒と煙草と、銀製のもの。

食堂は広いが、陰気な雰囲気だ。窓もない石壁に覆われて、松明が灯っている。まるで葬式場のような湿っぽさで、悠太は大嫌いだつた。ここで飲み食いする連中も汚らしく、灰色の破れたローブを着ている。飯も茶色いスープに萎びたパンがでるだけ。厨房で料理をする連中は一応、見た目は綺麗な白い白衣を着ているが、よく見るとやはり色々な汚れがこびりついていて、清潔とは程遠かつた。重なったお盆の一番上を取つて列に並ぶ。小学校の給食の配膳を思い出すが、雰囲気は似ても似つかない。

食事を盛るのは萎びた老婆で、鼻が尖つていて魔女のようだった。名前はカーム・スンという。日本人ではないのはわかるが、他の国の人間というわけでもない。彼女は悠太を見ると、少しばかり唇を曲げ、笑みを作つて見せた。その笑みは彼女を小鬼のように見せた。彼女なりの挨拶の仕方なのだろうと思うが、悠太はその挨拶に応じる元気もなく、ただ茶色いスープが碗に盛られるのをぼんやりと見ていた。

木のテーブルの、適當な場所に座る。人の少ない場所を選んだが、すぐに他の連中が座りだしていつぱいになつた。

まだ賑やかなほうだった。ビールを飲んだ者たちがご機嫌になつているのだ。喧嘩を始める雰囲気でもなく、少しだけ軽い雰囲気になつた。それでも全体を包み込む重苦しいものが消えることはなか

つた。

松明をぼんやりと眺めながら、黙々と湿氣つたパンを口に運び、水と一緒に喉に入れる。水はまずいが、無理して飲みほす。質素な食事は終わり、悠太は席を立つた。周囲にいる連中はどうみてもアジア人の顔つきをしていない。悠太は彼らを外人と認識していたが、一体彼らがどのような人種なのか知らなかつたし、知る気もなかつた。他の連中も悠太のような別の場所からきた人間に對して無関心だ。どちらも境遇は同じで、人種の違いなど些細なものだつた。会話も通じる。

部屋に戻つても退屈なので、外をうろつくことにした。狭苦しい石壁に覆われた場所を離れ、外に通じるアーチの扉を開いて外に出る。時刻は昼を少し過ぎたばかり。天氣はどんよりとしていて、雷が遠くで鳴つている。今にも雨が降り出しそうな空氣。悠太は外の庭園を歩く。赤と白の薔薇が無数に咲いている庭園をじばしさまよう。ここは好きだつた。ここだけが一番癒される場所だつた。

白いぼろ着を着た少女が赤い薔薇の咲く花壇の前に立つていた。赤い目をした少女は、肌が白かった。ほつそりとした体は栄養が足りてゐるとは思えない。にもかかわらず、少女の顔はあどけない美しさを持ち、細木とはいえ、芯の強さを感じさせる雰囲気をまとつてゐる。

少女は悠太に気づくと、兎のように赤い目を向けた。悠太はたじろかなかつた。少女のことは知つていたし、赤い目も前ほど恐ろしく感じない。最初の頃は気持ちが悪かつたが、そんな考えを反省し、そして今となつてはどうでもよくなつた。

話しかけることはしなかつた。そのまま通り過ぎる。彼女もまた、異端者なのだ。悠太とはまた違つた存在ではあるが、もうどうでもいい。

これからどうじょうかと悠太はぼんやり思つ。薔薇の庭の奥には森がある。深い深い森が。森の向こうがどうなつてゐるのか、知るものはない。聳え立つ高木が無数に並ぶ森は見るだけで気分が滅

入る。森の手前には見張りが立っていて、交代制で絶えず監視を行っている。だが昼間は暇なので、見張りも欠伸をこらしながら退屈な仕事に耐えている。

悠太は森を背にし、自分が壇にしている建物を見やつた。やはり監獄のように重圧的な雰囲気を持つ石造りの建物は、見たところ放置されて何年も立っているかのような古臭い建物だ。苔むし、色あせ、欠けている。汚らしい錆色も混じり、まともな人間が生活しているとはとても思えない。建物に上階はなく、高さはないが幅広だった。そして建物のさらに東にも同じような建物があり、南に一番大きい建物がある。全部で三つあり、そしてそれだけでしかない。後は周り全てを森が覆っている。三つの建物と森が悠太の現在生活している世界の全てだった。

肩に何かが当たった。鼻に冷たさを感じた。雨が降ってきた。まだ小雨だが、濡れるのは嫌だった。のろのろと建物まで戻る。少女はいつの間にかいなくなっていた。彼女は雨は大歓迎だろうなと悠太は思った。

建物の中に入り、自室へと戻る。ベッドに横になる。それから？午前中を睡眠に使つた。寝る気分にはなれない。だけど、何をする気分にもなれない。壁の向こうから雨音が聞こえてくる。相当強い雨のようで、雷と一緒に激しい音を立てている。すぐに戻ったのは正解だったようだが、悠太はどうでもよさそうに天井を見上げるだけだった。

ここにきた理由はわからない。寝て、妙な夢を見て、起きたらここにいた。だから悠太はここは自分の夢の続きをかもしけないと思つてみたりもしたが、最近ではそんな希望を抱くこともなかつた。床下には魔法陣が描かれている。召還という単語が脳裏をよぎつた。自分は呼ばれたのだろうか。誰かに。周囲には見知らぬ人間たち。古ぼけた、中世のヨーロッパを彷彿とさせる様相の人々が取り囲み、悠太を見ている。その顔は様々だが、喜んでいる表情をしているのは一人もいなかつた。

妙な言葉を口々に喋りあつてゐるが、その顔を見る限り、召還に失敗したのだろうと悠太にも想像はついた。つまり、自分はきたときからいらない存在だつた。

一人の眼鏡をかけ、青い髪を生やした男が悠太に近づいて握手を求めた。悠太はそれを断つた。そんな余裕はなかつたからだ。周囲にいる連中が恐ろしく、環境が奇妙で、気味の悪いものにみえた。悠太はおびえた。

「怖がらせてしまつて申し訳ない」眼鏡の男が言った。流暢な日本語だつた。よくみるとその男は日本人の顔つきをしていた。「ここは君や私が元々住んでいた世界とは違う、カストアという小さな小さな世界だ。我々は救世主を求めている。そして別の世界からその者を召還しようとしたのだ。だが、失敗した。君は君の住んでいる世界にはもう戻れないかもしだれけど、ここでゆつくりしていつてくれ」

悠太はわけがわからず、彼らに手を引かれるかのように今の部屋へと案内され、そして食堂と食事時間、トイレの場所を教わつた。それだけだつた。後は、もう、孤独のみが取り残された。

最初は一人だつた。ベッドは一つあつたが、誰もそのベッドを利用する者はいなかつた。別に気にはならないが、なんとなく過去に

それを利用した者がいたのではないかと思い、なんだか薄気味悪かつた。利用者はどこへいったのだろう。

悠太がここにきてから数日後、悠太と同じ日本人がやってきて悠太の部屋で寝ることになった。同じ場所からきた同じ人種ということで、悠太は期待した。しかし、すぐに失望に変わった。

「ここは一体どこなんだよ」男は荒れていた。壁を蹴り、大声を上げ、悠太を震え上がらせた。最初のうちは、次第になれてきた。男はたんにここが怖いだけなのだとわかつたから。

男の名前は川越満みちるといい、高校生のようだった。悠太よりも一周りほど大きな体をしているが、悠太よりも臆病で、廊下に足音が聞こえるだけでびくりと体を震わせるほどだった。おそらく男は以前には普通の高校生だったのだろう。だが、ここにきてこの異質な雰囲気にやられてしまったのだ。男は常におびえていて、悠太は厄介な同居人がてきたとため息を漏らした。

「ここは一体どこなんだよ？」

満は布団を頭からかぶつて震えていた。悠太には説明はできない。だけど、満は順応という言葉を知らないらしい。中学一年生になつたばかりの悠太でも環境に慣れようという努力はしていた。

結局、満は発狂した。突然奇声を上げると外に飛び出し、森の中に消えた。そして数週間後に死体で発見された。妖精にやられたようだ。

目を開ける。腕時計を見ると五時を過ぎている。すでに夕方になつていた。部屋の外では足音がせわしなく聞こえ、どこか慌しい様子だ。

異人たちの叫び声。悠太は飛び起きた。壁にかかっている剣を取る。鎧びれた銅の剣は、悠太には重いし、切れ味もほとんどない。それでも一応持つていく。悠太は疑問を持っていた。まだ夜ではないのに。正確にいうと、七時になつていない。

外に出る玄関口で一人の男が倒れていて、周りの連中は男を介抱

していた。男は肩から出血していた。酷い怪我のようだが、他の連中が笑みを漏らしたのを見ると、男は大丈夫のようだ。

悠太は森を見た。木々が風で揺れている。薄暗さの中で見る森はますます不気味で、悠太はすぐに見るので止めた。

男は森の見張り番だった。

「彼は見張り番をしていた。だけど、少し森の中に入りすぎたらしいな」眼鏡をかけた男は悠太に説明をした。そして、ふと厳しい顔になる。

「このぶんでは、今夜も大変だろうな」その声は小さく、絶望に溢れていた。それから彼は悠太にはわからない言語でその場に連中に指示をし始め、周りのものはそれに従つた。日本語を扱えるこの男はそれなりの地位にいるようだ。

悠太は自室に戻つた。今では、自分の部屋だつた。剣は壁に立てかける。もしかしたら、また必要になるかもしれないからだ。今までそれを使つた試しはなかつたが。

さすがに寝る気にはなれなかつた。暇つぶしに、またうろつくにしてももう薄暗いし、警戒時間なので外には出れない。

誰かいないだろうか。この孤独と虚無感を埋めてくれる相手は。悠太は廊下に出た。松明は常に灯つていて、陽光は差さない場所でもそれなりに明るい。歩いているとロープの人々とすれ違つが、誰も挨拶を交わすものはいない。こちらが異人だからか、そういう習慣がないのか、すでに挨拶を交わす余裕もないのか。悠太にどうては有難かつた。いちいち通りすがりの連中を気にしていたくない。眼鏡の男は別だつた。彼は気さくに挨拶してくる。会うこと自体稀だが、すれ違いそうになつた。

「やあ。散歩かい？ 外には出ないようにな。訓練場に行つて見るといい。前もいつたが、ここには大した娯楽がないからね。体を動かすのはいいことだよ」

悠太は頷いた。そのまますれ違う。訓練場には行きたくない。みんな剣に腕のある連中ばかりで、しかも子供の相手をしている暇は

ないときていいのだ。まともに相手をしてくれるのは滅多にない。少し先でなにやら楽曲のよつなものが聞こえてきた。

大部屋の扉が開いていて、その奥で女たちがダンスをしている。楽器を鳴らして、楽しげに踊りまわっている。女たちの年齢は様々で中年から少女まで。みな嬉々とした様子で肩を組み合いながら悠太にはよくわからない踊りを踊り、端から見ると実に楽しそうではあつた。

その場を通り過ぎる。突き当たりの扉には訓練場がある。扉は青銅でできており、重々しい見た目が入るものを選ぶような気分にさせられた。悠太はどうしようかと悩んだ。そしてやめることにした。左側に進路を変える。黒衣の男がこちらに歩いてきていた。みすぼらしい衣をまとつた他の連中とは違い、黒衣は破れてなどおらず、実に立派で、厳かなで、そして相手を不安にさせるほど薄気味悪いものに見えた。男は長身で、頭を頭巾で覆つていて目が見えなかつた。にもかかわらず男は悠然と通路を歩き、目の前にいる少年を気にすることなく通路を曲がつていつた。

黒衣の男は今の男だけではないが、みな不気味だということは共通していて、悠太は彼らが苦手だつた。建物のほとんどの者は悠太にとつて空氣のような存在だが、黒衣の者たちには畏敬のような念を抱いた。

悠太は立ち止まつていたが、男が去ると再び歩いた。様々な扉があるが、ほとんどは悠太の部屋のような小部屋に通じていた。悠太には用のない扉群。そして悠太が興味を持つ扉といえば今の時間では遊戯室くらいだつた。遊戯室の前は平凡な木の扉で、悠太は扉を開けた。

遊戯室には興味も湧かない独楽や子供用の積み木などがある。遊んでいるのは主に幼児たちや十歳未満の子供たちで、悠太のような年頃の子供は一人もいない。悠太くらいの年頃の子供はいるにはいるが、彼らは彼らの遊びをしていくよつで、悠太は知らなかつた。親しくしてなかつたから。

遊戯室には実は全く興味がないのだが、悠太の目指す図書室には遊戯室の奥の扉から入るのが近道なのだ。彼はつまらない玩具で遊ぶ子供たちを眺めながら奥へいき、扉を開けた。

図書室には全く誰もいない。冊数は少ないが、全く読めないということのない本ばかりである。全てが日本語で書かれた本だつた。誰が持ってきたのか、定かではないが、ここには和書が二百冊ほど置いてある。悠太は適当に面白そうな本を手に取る。四冊選び、図書室を去つて自室に向かつた。

本を読む。内容は恐怖小説で、悠太には少し難解だつたが、なんとなく内容は理解できた。数ページ進むだけで一時間以上経つていた。時計を見る。もう七時近い。

悠太は本を脇に置いた。そろそろだらう。今夜も当然、ベルが鳴るはずだ。悠太は七時になるまでじつと時計を見ていた。そして七時になつた。鐘が鳴り響いた。

悠太は剣を取つた。先ほども剣を取つたが、実は久しく剣を握つていなかつた。興味が全くないわけではなかつた。ゆっくりと部屋を出る。

警戒のベルが鳴つた際には基本的には建物の外に出でてはならない。森の中には妖精と呼ばれる存在がいて、夜になると建物の中に入つてこようとするときがある。彼らは人を恐怖でもつて殺すことができる。何人も妖精によって殺されてきた。七時以降は危険だつた。だが建物の中には妖精がくることは滅多にない。彼らは銀に弱く、外に通じる扉には全て銀が使われている。ごく稀に入つてくることもあり、悲劇が生まれることもある。夜明けまえに森の外にいると彼ら妖精は死んでしまうようだ。

妖精が現れたら剣を試してみたかつた。建物の外に行けば妖精と戦うことになるかもしない。試してみたいと思うが、怖くもある。一度建物内に妖精が現れたとき、悠太は妖精を目撃していた。それは少女の姿だつたが、幻影で、その正体が背後に見え隠れしている

よう見えた。怨靈めいた、不可思議だが悪意のある存在。妖精はそういうものだつた。幻影は、見る者を安心させるために姿は見るものによつて変化する。

剣を持つて廊下に出たはいいが悠太にはまだ外に出る度胸はなかつた。仕方なく、部屋に戻る。八時まで本を読み、それから食堂に向かう。集まる人々はなにやら奇妙な言葉で盛り上がりつてゐる。おそらく賭博の話題だ。彼らはコインを使って悠太にはわからない賭け事をしている。それは彼らにとつて生活の一部となつてゐるようで、賭博で殺し合いに発展することもたまにある。

悠太は黙々と食事を食べた。湿氣つたパンを口に運び、スープを飲み、食堂を去る。パンやスープの材料をどこから手に入れるのか、悠太は知らなかつた。何もわからなかつた。部屋に戻り、本を少しだけ読み、九時になると寝た。

有川清志^{きよし}は川越満の次にやつてきた日本人だった。彼はやはり悠太と一緒に部屋で暮らすことになった。

「俺は有川清志。お前は？」有川清志は前の満とは違い、さほど自分が置かれた状況に戸惑っている様子はなかった。

「御影悠太」悠太は答える。

「御影？ かつこいい苗字だ。俺もそんな苗字だつたらな」清志は笑い、悠太は随分落ち着いているなと訝しく思った。満ほどではなくとも、もつとこの状況に不安を覚えてもいいはずだ。ここにきたときの悠太は不安と恐怖と孤独で押しつぶされそうだった。

「御影悠太だな。俺とお前だけなのか？ なんというのか……日本人つづうか、普通の奴つて」

「まだいるみたいだけど、よくわからない」

「へえ？ なんだかお前も変わってるなあ。こんなところにいるのに、まるで他人事みたいだ」

清志は笑い、悠太は自分は変なのかと不安になった。

「まあ、気持ちはわかるけど。悠太は幾つなんだよ？ 年

「十三」

「十三つ……まじでガキだな。俺は二十三なんだ。まあ、とにかくこれからよろしくな。まだ右も左もわからないんで。先輩のお前が頼りだ。あと、あの眼鏡の野郎はいい情報源になりそうだ」

清志は悠太に笑みを向けた。有川清志は背が低く、長身で、髪は坊主頭だった。顔つきは野生的だが整っていて、自信に溢れた目をしている。顎には髭を蓄えていた。悠太にわかるのはそれくらいだった。有川清志がどういう人物なのか、これから段々とわかってくるだろう。しかし個室に一人もいるのはいやだなと思う。ストレスが溜まりそうだ。同じ年くらいだったらしいが、見知らぬ大の大人と一緒になのだ。孤独もいやだが、このシチュエーションも好きには

なれなかつた。

「なんだか眠いや。寝ても大丈夫だよな」

「もう寝る時間だから」

「そつか。わかつた。おやすみ。この布団、見た目は汚いけど臭いはないな。なんとか眠れそうだ」

それから驚くほどの速さで清志は寝息を立てて寝てしまった。悠太はこの新入りに興味を持った。

次の日の朝、悠太は食堂へいき、黙々と、淡々と食事を取る。それから室内に戻った。しばし本を読み、飽きたと外に出た。薔薇園にいくと昨日と同じように少女が立っている。少女は悠太を見て、それから再び薔薇を見る。悠太は少女をすれ違い、それから小道を続き、川に架かった橋を渡つて森に入る。わけにはいかない。絶えず見張っている監視員が悠太の前に立ちはだかり、首を横に振つて悠太にはわからぬ言語を使う。悠太はわからないが、森に入れないことは最初からわかつっていた。そのまま引き返すと見張りも持ち場に戻った。森に入つてみたいという強い願望があるわけではなかつた。ただ、森が自分を呼んでいる気がしたのだ。

部屋に戻る。黙々と本を読む。悠太はもう長い間喋つていなかつたが、彼はそんなことすら忘れていた。本に没頭できるわけもなく、数ページ読むと本を脇に置き、壁に背をかけてこれから何をして時間潰すのか考えた。

昔のことを思い出す。まだここにきて五ヶ月ほどだが、もう何年も昔のことのようを感じる。最後に家族と食事にいった場所はとある中華レストランだつた。母親と父親と妹。ごく普通の家庭。思い出すと涙が出たものだが、今はぼんやりとした記憶でしかなかつた。友人たちはどうしているだろうか。大人しい悠太にの周りには賑やかな連中が多かつた。だが、今は親しい者もいない。

清志のことが頭によぎつた。彼は今どこにいるのだろうか。

清志を初めて食堂に連れて行ったとき、彼はすれ違う連中全員に

気さくに挨拶をしていた。誰も彼にまともに挨拶を交わさなかつたが、彼は余裕を感じる笑みを絶やさなかつた。食堂にいくと彼は汚い場所だと悠太に愚痴つた。

「何だよこの飯は……残飯みたいなだな。しかも、まずい。これから先こんなのをずっと食べなきゃなんねえのか。地獄だ」清志は延々と愚痴りながら食事を続け、悠太は周りの連中が日本語を知らないよかつたと思つた。が、それでもニコアンスは伝わるもので、どこか不愉快な顔つきをこちらに向けてくる者もいた。

「あんまり文句はいわないほうがいいよ。なんか睨んでる人たちもいるし」

「気にすんな。お前もまずいと思うだろ？ これじゃドッグフードのほうがましだ。ドッグフードないのかよ、交換してえよ」

食堂を出ると清志は外に出てみたいといつた。

「この世界つてどうなってるんだ？ お前色々知ってるんだろ、教えてくれよ。どこが出口なんだよ？」

悠太は好奇心旺盛の新人の欲を満たしてやるために外へ通じる玄関口まで案内し、外を見せてやつた。清志は外の風景を見て酷く興奮した。

「何だよ、外いけるんじやん！ それじゃ、こんなといひたつあとおさらばしようぜ」しかし清志は悠太の顔つきを見てすぐに興奮を抑えた。「何か駄目な理由があるのか？」

「森にはいけないよ。妖精が出るっていう話だし、この建物は森に囲まれてるんだから」

「妖精？」

悠太は妖精のことを説明した。

「なるほど、つまり化け物が出るってわけか。だけどそれじゃ一生ここから抜け出せないってことだけど、お前それでもいいのか？」

「いいわけないけど、どうすればいいの？」

「戦うんだ」清志は力瘤を作つた。細身ながら筋肉質の清志は盛り上がつた腕を悠太に見せつけた。

悠太は首を振る。「無理だよ。あいつらは本当に化け物なんだ」

悠太は連中の、妖精たちのことを知っている。彼ら、或いは彼らは魔法めいた存在だ。彼らは人を恐怖に落とし、殺す。一度彼らは妖精に出くわしたことがある。見張りをかいくぐつて建物内に侵入してきた妖精に、トイレにいこうとしたときに遭遇した。悠太が見た妖精は濃厚な青色の目をした少女の姿だった。背は小さいが髪が長く、口元は歪んでいる。悠太は見ただけで体を震わせた。よたよたとした足取りで悠太に近づいてくる。見た目は人間だが、ところどころいびつな、雑な人形めいた存在。彼女が近づくにつれ、悠太は凍りつくような冷気を感じた。そして冷気はだんだんと強まり、青い目がだんだんと悠太の中で大きくなつてきていた。背後から兵士が斬りかからなければどうなつていかわからない。妖精は斬られると霧散した。

「危ないとこらだつた」いつの間にか眼鏡の男が立っていた。「君は今、妖精に殺されそうになつたんだよ。あと少し遅れていたら君の命はなかつただろうね」

大げさとは思わなかつた。冷気は、恐怖は耐えられそうもないところまできていたからだ。悠太は暖炉の前で温まるように言われ、暖かいスープを飲んで再び眠つたのだった。

今でも鮮明に覚えている恐怖の記憶だ。

「あれは怖かつたし、もう少しで死ぬところだつたと思つ」

「妖精さんは夜になると外に出てくるんだな？」

「そう。だから夜は外には出られないみたい」

「昼でも森の中に入れば妖精に襲われる？」

「そうみたい」

清志はくつつくと笑つた。「ちょっと出来すぎた話だな。いや、お前が妖精に襲われたのは事実かもしれないけどさ、だけど森に囲まれて、その森には化け物が出るからいけないっていうのは、なんだか口実臭いな」

「口実つて？」

清志はふうっとため息をついた。「お前がこんなに幼くなれば、すぐにも疑問を持つことなんだけどな」

そういうて悠太の頭を撫でる。悠太は嫌だったが、相手は自分よりも一回りも大きい相手だ。されるがままにする。

「つまりさ、俺達を外に出さないためにでっち上げている可能性があるってことさ。だけどお前が妖精に事実襲われているわけだし、妖精はいるんだろう。だとすると森にも妖精がいるってことなんだろうな。よっぽど度胸のある奴じゃなければ森には近づかないわけだ」

「地図は一応あるんだ。見てみる?」

悠太と清志は円を描く小道を進み、看板を指差した。それは地図になつていて、地図の上には世界地図と書かれてあった。地図にはこここの建物群と、周りを覆う森があり、その先には何もなかつた。

「南東に湖か。北西に村みたいなのがあるな。あ、北東にもある」

「そこにはいけないよ。森があるもん」

「しかしこれが世界地図? どうこういとだらうな。森の向こうは黒く塗られている」

清志のいうように、森の奥は黒く塗られていて、そこから先はわからない。

「これが世界の全てなんだって」眼鏡の男からそう聞かされていた。「ふうん。信じられないけど、こんな世界ならそれもありかなって思つちまつよ」

だが清志はどこか納得がいかない様子だった。

「帰るにはどうすればいいのかね」

「帰るつて? 帰れないんだよ!」悠太は悲痛の叫び声を上げた。もう帰れないんだ。涙が出るが、ここから元の、気ままな日常生活には戻ることができないんだ。

「馬鹿。一度きたからには、絶対に戻る方法はあるもんだ」

「そうだと思いたいが、悠太は首を振った。

「無理だよ。妖精がいるんだから」

「

「大丈夫。絶対何かいい手があるって」

清志は握手を求めてきた。悠太はわけがわからず清志を見る。

清志はにっこりしている。

「約束だ。ここを一人で脱出しよう」

「脱出」

「そうだ。俺とお前でここを抜け出そうぜ。絶対に帰れるって。俺を信じろ」

悠太は握手に応じた。それは約束に応じたということ。一人でここから抜け出すという約束を。

「よし、じゃあ俺は周辺を探つてみる。日本語の通じる奴もいるみたいだし、色々訊きまわってみるよ。お前もお前で何か探りを入れてみろよ。じゃあ、また会おう」

「森は危険だよ」悠太は清志の背中に忠告をした。清志は振り向かず手を上げて振つて見せた。

悠太は空を見た。薄暗い空だ。もうじき降り始めそうだった。建物内に入る。どうしたらしいのかわからないが、とにかく眼鏡の男に色々聞いてみることにした。眼鏡の男の居場所は知っているが、本を読んでいる以外は結構別の場所を動いて回っているから捕まえにくい。部屋をノックする。

「どうぞ」

扉を開けると男は本を読みながら煙管を吸っていた。

「何かな？」

「色々知りたいんです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5660z/>

謎世界の救世主

2011年12月20日21時47分発行